和歌山県地球温暖化対策情報誌

わおん通信

2019 冬号 vol.35

特集

「おもしろ環境まつり」その先にあるもの

12／1の振り返りと今後の展開について

CONTENTS

P2－P3
県内地域の取組
汗を流して気候危機を伝えていく
自らの命をどう自らで守るか
私たちの行動が未来をつくる！　カードゲームで体験
和歌山で持続可能な未来を見据えた場づくり
マッチ１本で昼ごはんをつくってみよう
生産者のリアルな声を共有し合う

P4－P5
「おもしろ環境まつり」その先にあるもの
12/1の振り返りと今後の展開について

P6 県情報
和歌山県環境学習アドバイザー
派遣事業を知っていますか？

P7 推進員さん訪問記㉚
なるほど　ザ・ワード

P8 INFORMATION

汗を流して気候危機を伝えていく

2019年9月22日
気候保護のためにin和歌山
加太海水浴場

[Peaceful earth]

2019年9月23日にニューヨークで緊急開催された「国連気候行動サミット」に合わせ、世界各国で様々なイベントが行われました。そんな中、和歌山でもお母さんたちが立ち上がりました。発起人である堀切美央さんと加藤里菜さんの呼びかけに応じ、和歌山市の加太海岸に大人や子供45人が集まりました。気候変動の現状を説明し、「気候を守ろう！」を合言葉に一人一人の行動の重要性を訴えました。この日みんなで取り組んだのはビーチクリーニング。プラスチックごみは長時間太陽光にさらされると、温室効果ガスが発生するためです。トングを持った参加者が一斉に清掃を開始。ごみを次々にバケツやごみ袋に入れていきます。約1時間半をかけて集めたごみは約20袋になりました。「こんなにたくさんのごみが打ち上げられている現状にショックを受けました」と参加者。イベントが終わり、主催の堀切さん、加藤さんは「まだまだごみは取り切れていません。私たちだけでなく、待ったなしの気候変動の現状に気付いて同じように行動する人がもっとたくさん増えてくれればと願っています。」と想いを話してくれました。

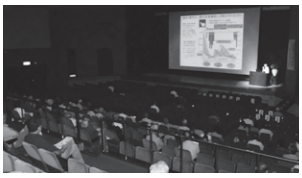
（県センター）

自らの命をどう自らで守るか

2019年9月29日
「地球温暖化と減災対策」講演会
橋本市産業文化会館

[伊都・橋本地球温暖化対策協議会]

昨年今年と大きな災害の発生が続く中、「自らの命をどう自らで守るか」をテーマとした講演会が橋本市で開催されました。基調講演では和歌山地方気象台調査官芝本章宏氏から地球温暖化の現状と将来予測について解説を受けました。2019年3月に改正された内閣府の「避難勧告等に関するガイドライン」についても説明があり、来場した110人は、その重要性を学びました。このイベントには、橋本市・かつらぎ町・九度山町・高野町の各自治体のほか、橋本防災士の会も共催で参加しており、防災への取り組みの紹介や防災グッズの展示など具体的な対策を知る良い機会となりました。この講演会直後に台風19号、21号が相次いで日本列島を襲いました。東海から東日本にかけて広範囲に被害が及び、正にこの講演会で述べられた大雨の際の早期避難の重要性を痛感することとなりました。今後は温室効果ガス排出量の削減を進める「緩和」を行いつつも、「適応」にも積極的に取り組んでいかなければならないと強く感じました。（推進員　黒井成男）



私たちの行動が未来をつくる！カードゲームで体験

2019年10月5日
地球温暖化防止活動推進員総会
わかちか広場（和歌山駅地下イベントスペース）

[和歌山県センター]

より良い未来の世界を創りたい。でも「良い未来」とは？そんな疑問や想いをカードゲームで体験するイベントが開催されました。ゲームの名は「SDGs de地方創生」。SDGsのゴールである2030年までに「地域をどのようにデザインするか」を考えていく内容です。地球温暖化防止活動推進員に加え、一般の方の参加もあり、JR和歌山駅西側にある「わかちか広場」には33人が集いました。ゲームでは参加者全員が、一つの「村」の住人となります。住人は、商店や企業などの「住民役」と役所窓口の「行政役」に分かれ、様々なプロジェクトを実行してゲームを進めます。プロジェクトには実社会の内容が反映されています。例えば、「教育の無償化」というプロジェクトを行うには莫大な予算と人材が必要です。しかし、ゲームが進むたびに変化する4つの指標「人口」、「経済」、「環境」、「暮らし」の条件が整わないとプロジェクトを進めることができません。その条件を整えるために住民、行政が話し合いを重ねて協力していきます。ゲーム終了後の振り返りの時間では、進行役を務めた公認ファシリテーター赤岡誠さんから「個人でできることには限界があり、それぞれの立場の垣根を越えた考え方が重要になってくる」と解説がありました。ゲームの中で感じた「パートナーシップの大切さ」を目の前にある課題の解決につなげていければと感じました。（推進員　石渡祥子）

和歌山で持続可能な未来を見据えた場づくり

2019年10月18日
『家族農林漁業プラットフォーム和歌山』設立
和歌山県JAビル

[家族農林漁業プラットフォーム和歌山]

県内で持続可能な一次産業（小規模）の未来を考える人たちが「和歌山農林漁業プラットフォーム和歌山」（FFPW）を設立しました。これは、「国連家族農業の10年（※）」を受け、日本で設立された「家族農林漁業プラットフォームジャパン」（FFPJ）の流れをくむものです。

国連食糧農業機関（FAO）事務総長は、「国連家族農業の10年」開幕式において「SDGsが掲げる目標を達成するためには、世界中の家族農業が不可欠である」と述べています。つまり、気候変動の影響による食糧確保が危ぶまれる中、家族農業を中心とした農業政策への転換が、世界共通の重要課題として位置付けられているということです。

FFPWでは、今後FFPJと連動し、具体的に①「国連家族農業の10年」に関する啓発活動（シンポジウム、講演会、学習会の開催、広報活動）、②和歌山県及び近隣地域の食料・農林漁業・農山漁村関連施策に関する現状把握と課題抽出を中心に活動を進めていきます。FFPWでは会員を募っています（年会費　団体1口5,000円、個人1口1,000円、いずれも1口から、またオブザーバーは1年限り会費無料）。

和歌山の持続可能な小規模農林漁業の未来づくりに是非加わってください。

（※）2017年12月に国連総会で日本を含む104か国が共同提案し、全会一致で可決されたもの。世界の食料安全保障確保と貧困撲滅に大きな役割を果たしている家族農業について、各国が家族農業に係る施策を進めるとともにその経験を他国と共有すること、FAO等の国際機関は各国等による活動計画の策定・展開を先導すること等を求めています。

マッチ1本で昼ごはんをつくってみよう

2019年10月22日
県地球温暖化防止活動推進員養成講座@和歌山市
和歌山市青少年国際交流センター

[和歌山県センター]

「防災意識を高め、具体的な行動を知ること」を目的に講座を開催しました。この日は12組36人の家族が参加。講師は和歌山県キャンプ協会理事の林美由貴さんです。最初に林さんに災害時に取るべき行動など知っておきたいポイントを分かりやすく説明していただきました。その後、燃料となる木の枝を拾いながら炊事場まで歩いて移動。炊事場では火起こしに欠かせない薪の組み方を学びました。マッチを持つのが初めての子供も多く、最初は怖がっていたものの、次第にコツをつかみ、次々とかまどに火が灯っていきます。今回は災害時にも役立つ方法で調理。

ビニール袋に具材を入れ、湯せんしてスープをつくりました。食事の後は気候変動について学習。3択クイズで地球温暖化の現状を知り、改めて防災意識を高めました。最後に親子が自分たちの手で段ボールや厚紙を使っておもちゃをつくりました。慣れない避難所生活でも「子供たちが心豊かに過ごすこと」に主眼を置いた取り組みで、それぞれの親子のアイデアが発揮される楽しい時間となりました。参加者は「火を使うこと、自分の手で生み出すことの大切さとともに地球温暖化についても話し合っていきたい」と話していました。

（和歌山県センター）

生産者のリアルな声を共有し合う

2019年10月25日
県地球温暖化防止活動推進員養成講座@紀の川市
おいけのまど

[和歌山県センター]

4人の生産者の方をお招きし、「県内の農家さんたちは温暖化についてどう思っているのか」をテーマに講座を開催しました。今回は持続可能な暮らしに関心を持つ方々を中心に26人が集まりました。まず3択の地球温暖化クイズで今の地球の現状を全員で共有しました。その後、生産者の方から具体的なお話を聞きました。昔に比べると気温が高くなっているため、作業中に熱中症になったこと、そのため農作業時間を工夫していること、種をまいても虫が元気で全て食べてしまい、作物が作りにくくなっていることなど気温の極端な変化とその影響を肌で感じ、対応していることを知りました。一方、消費者の立場からは「生産者は私たちの命を育んでおり、農業に関心を寄せるとともに具体的な対応や支援の動きが必要」といった意見があがり、各々の役割を超えて歩み寄る重要性について知る機会となりました。今回は農業に関わるテーマでしたが、今後は林業、漁業など他分野をテーマに同様の場づくりを予定しています。（和歌山県センター）

連載コラム「推進員 精ちゃんのあしたらこうなった」は誌面スペースの関係で今号はお休みします。

「おもしろ環境まつり」その先にあるもの　12/1の振り返りと今後の展開について

地球温暖化防止月間初日の12月１日、小学生を対象にした「体験型」イベント「おもしろ環境まつり2019」が開催されました。昨年に引き続き会場となったJR和歌山駅近くにあるみその商店街には、環境保全を中心に65団体が一堂に会し、62ブースを出展。暖かく穏やかな天気となった当日は、昨年を上回る2,040人が来場し、会場は熱気に包まれました。

連動企画の実現に向けて
―海の現状とまつりをつなぎたい―

今ある環境保全の姿を伝えることを目的に掲げて開催している「おもしろ環境まつり」は、会場づくりに廃材やごみを利用してきました。しかし、来場者には会場を彩る装飾が「海ごみ」と呼ばれる海岸に打ち寄せられた漂着物を利用したものだと分かりづらく、イベントの趣旨をうまく伝えられていないのではないかという課題がありました。そこで作品とイベントをつなぐためのアイデアを模索しました。

連動企画の実現
―海の現状とまつりをつなぐ―

「子供たち一人一人が作品をつくり、イベント当日に展示する」というアイデアから今年度新たにプレイベントを企画しました。和歌山市加太で開催されたハロウィンのお祭りに「海ごみアート」コーナーを出展。会場を訪れた子供たちが、思い思いに色とりどりの漂着物をリング状の針金に通して作品にしていくというものです。

この企画をプロデュースしたのは、第１回目のおもしろ環境まつりから関わっているWooky(ウッキー　)富士原さん。同じアーティストメンバーの石田真也さんも子供たちの作品と自身の作品を融合するよう工夫を凝らしました。和歌山県環境学習アドバイザーである平井研さん（詳細は６ページを参照）は、様々な海ごみの種類のほか、浜辺で見つけても触ってはいけない物など、安全面での注意を記載したシートを作成し、参加者に配布しました。結果は大盛況。子供たちから「もう一回やりたい！」という声が上がりました。

まつり当日

わかやまこどもエコチャレンジ

和歌山県が毎年夏休みに実施している「わかやまこどもエコチャレンジ（環境絵日記）」。小学４～６年生の児童が家族と一緒にエコ活動に取り組み、その様子をレポートにまとめたものです。５年目を迎えるこの取り組みに、今年度は過去最高の4,320点が寄せられました。どのレポートからも児童が家庭の中で率先して活動した様子が伝わってきました。この展示は、環境意識の向上につなげようと第１回目のおもしろ環境まつりから続けられています。

今回は１か所で全ての作品をゆっくりと見られるように、パソコンとプロジェクターを利用したスライドショーと地域別にまとめた冊子方式での紹介になりました。

ブース出展や学習発表では子供たちが活躍しました。クラスごとに学習テーマに対する課題を調べた学習発表では、自分たちにできることや次の行動を具体的に紹介し、来場者への協力を積極的に呼びかけていました。

ブース出展

有田川の干潟を毎日親子で掃除しているという「もっとの会おそうじクラブ」のブースでは、日頃の活動を写真や子供たちお手製のクイズで紹介。来場者は足を止めて熱心に見入っていました。また、ペットボトルキャップを使った工作もあり、参加した子供は、大人に手伝ってもらいながら一生懸命作品を完成させていました。

学習発表

会場中央のメインステージでは、和歌山大学教育学部附属小学校、和歌山市立雑賀小学校の児童による学習発表がありました。写真、図やイラストを交えた“巻き物”を使って地域の現状と課題、解決方法の提案が発表されました。また、地元や地域の課題だけでなく、外国で起きている水問題にも目を向け、ラオスに井戸を掘るための募金を呼びかけるなど、次の行動への具体的な働きかけで締めくくられていました。発表が始まると、あっという間に通路をふさぐほどの人だかりができ、小さい子供たちも大人もともに真剣な眼差しで発表に聞き入っていました。

来場者の声

今回の来場者アンケートには子供たちからの感想が多く寄せられました。

- わか山ってすごいなぁと感じた。
- 『ごみ』でかざりをつくっていてすごいと思った。
- 自分たちだけのかんきょうじゃないからほかの生き物を大切にしようと思いました。
- 何でもすぐにすててしまうが、物を大切にしようと思う。
- 「環境」の取り組みはふだんからかんたんにできるのだなと思った。
- かん境は今まで、ぼく達にはかん係ないとおもっていたけど、ぼく達にもかん係あるというのが分かりました。ぼくもこれからはかん境を守るためにできることはしようと思います。

保護者からは、「（子供に）良いイベントを見せられた。」「大切なことだとは分かっているけど、子供に説明しにくいこともあるので、このような機会はとても良い。」「環境を考えるというと難しそうだが、このイベントのように楽しみながら環境に対する取り組みに触れられるのは気軽で良かった。」「環境について子供にもっと考えてほしいので、いい機会だと思います。」「これを機会に子供とごみ問題について話し合ってみます。」という声がありました。

まつりのあと…今後の展開

近年、これまでに経験したことのない不幸な豪雨災害が増え、猛暑の影響も出ています。

2018年を振り返ってみると、７月に例年の２倍以上となる200mmを超える豪雨災害により、200人以上が死亡。6000件を超える家屋が全壊となる被害を受け、230万人が避難しました。また、埼玉県熊谷市で41.1℃を記録するなど全国的に猛暑となり、６月から９月の間に熱中症で159人が死亡、９万人以上が病院に搬送される結果となりました。2019年12月にスペイン・マドリードで開催されたCOP25（国連気候変動枠組み条約第25回締約国会議）では「日本が2018年の被害ランク１位である」と世界の気象災害を分析するドイツの環境シンクタンク「ジャーマンウォッチ」が公表しました。この公表によると、この１年間の経済的損失は農作物や家屋などの被害をあわせて358億ドル（３兆８千億円）を超えるとされています（詳細は次号で特集予定）。気候変動への対応は喫緊の課題ですが、様々な環境問題の解決には長い時間を必要とします。「おもしろ環境まつり」は、大人から子供へとバトンを渡す絶好の機会です。今後イベントを通じて、関わった全ての人々が「環境保全は自分の事」と捉え、様々な取り組みを進めていただければと思っています。「こんな活動をしてみたい」という要望や相談は、県センターまでお問い合わせください（巻末８ページ参照）。

和歌山県環境学習アドバイザー派遣事業を知っていますか?

県では、環境学習を推進するため、環境分野の専門家を「環境学習アドバイザー」として登録し、学校の授業（小学校から大学まで）や地域の勉強会に派遣しています。（事前の申請が必要です。）アドバイザーには山、川、海、大気、水質、まちづくり、リサイクル、最近よく聞くSDGsなど様々な分野の専門家がおり、「環境のことをもっと知りたい！」、「環境問題について考えたい！」という時、分かりやすくアドバイスをしてくれます。今回は、小学校へ授業に行く機会の多い２人のアドバイザーの先生（平井研さんと松本朱実さん）が、具体的にどんな授業を実際されているかを紹介します。

どのような授業をされていますか。

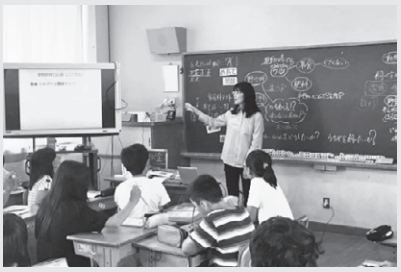
平井さん

私は小学校の総合学習で海の環境やSDGsに関する授業を行っています。授業の前にまず担任の先生と「これまでどんな授業をされてきたのか」、「これから生徒たちに何を学んでほしいのか、伝えたいのか」などを事前に打ち合わせします。そして、私が授業できる内容を説明し、授業計画を一緒に作っていきます。「環境」と聞くと、ちょっと難しそうに思いますが、まずは海の生き物観察会など、自然に興味を持ってもらうことから授業を始めていきます。

松本さん

私は以前に動物園で飼育員や学芸員として働いた経験を踏まえ、動物や標本など実物を介した環境学習支援を行っています。学校教育の単元と関連付けながら、教室や動物園などの野外フィールドで、生きた動物や標本資料などを子供たちに観察してもらい、生命や環境との関わりについて考えてもらう授業をしています。実物を通した体験学習はその後の学校での授業への意欲につながったという感想をいただいています。

これからどのようなことに取り組もうと考えられていますか。



松本さん

インターネットや本などから情報を得た知識にとどまらず、実物と実際に関わって生命を実感し、自分なりの「問い」を見いだすよう支援したいと思っています。自分の疑問や興味が出発点になる学びは、能動的になります。身近な自然や生物、環境、自分の生活との関わりに目を向け、主体的に関わっていくきっかけづくりをしていきたいです。

平井さん

大阪から引っ越してきた私にとって、和歌山の海をはじめとする自然環境は本当に豊かだと感じています。しかし、残念ながら地元の皆さんにとっては当たり前過ぎるようです。正に「灯台下暗し」です。そんな光の当たっていない素晴らしい自然に目を向けてもらうとともに、地域の「宝」に愛着を持ってもらいたいです。「僕たち、私たちは自然豊かな和歌山で育ったのが自慢です！」と言えるような授業、そして環境問題という答えのない問いに対し、「主体的・対話的」に学び、問題に対して行動できる、そんな子供たちを育むお手伝いをしていきたいと考えています。皆さんとお会いできることを楽しみにしています。

※申請方法は「和歌山県　環境学習アドバイザー」で検索して県のホームページをご覧いただくか、県庁環境生活総務課（TEL073-441-2674）までお問い合わせください。

松っちゃんの

推進員さん ひょっこり 訪問記㉚

紀の川市　原　伸行 さん

推進員第９期の原伸行さんは紀の川市生まれの紀の川市育ち。高校卒業後は岡山県の理科系大学に進学して機械メーカーに就職しました。４年後に実家が営む建設会社に就職し、現在は代表取締役専務として建設業に従事しています。原さんの会社のビジネステーマは国土強靭化と防災。そのため、災害時には太陽光発電の電力が役立つと考え、早くからソーラーパネルを導入しています。

推進員への応募動機は、地元のイベントで紀の川市地球温暖化対策協議会「エコネットきのかわ」のメンバーから声をかけられたからですが、温暖化を進めてしまう建設業の人間が推進員になるのはどうか？と迷ったとのことです。しかし、講義を受けてみると温暖化の状況がよく分かり、また防災という点からも温暖化防止が大事であると再確認したといいます。

「推進員としての活動は何もしていない」と原さんは謙遜して言いますが、エコネットきのかわではエネルギー部会に所属し、ゴミのリサイクル施設や原子力発電所、メガソーラー施設、環境ビジネスイベント等の見学に積極的に参加しています。また、近畿大学のいもエネルギー発電プロジェクト（イモをスライスして乾燥させて燃料とすることで、カーボンニュートラルの発電を可能にする）にも参加しています。そして、年４回（粉河環境祭・紀の川市民まつり・産業まつり・おもしろ環境まつり）のエコネットきのかわのイベントでは、ブースを出展し、温暖化の説明やエコチェックのアンケートの実施、発電自転車の紹介等を行い、熱心に活動しています。また家庭でも省エネには気を配り、環境負荷の低減に努めているとのこと。

さて原さんの会社では2010年より太陽光発電を手掛け、自宅では10kw、会社でも150kw、さらにデモ用の壁面発電40kwと合計200kwの発電を行っています。さらに電気自動車も導入して再生可能エネルギーの普及に努めています。

次期計画としては休耕田を利用したソーラーシェアリグを進めています。これは２メガワット（2000kw）強のソーラーパネルを設置し、その下を農地として活用するものです。日陰で育つシイタケやワサビ、シャインマスカットの栽培を検討しており、夏場の暑い時には地熱17℃の冷たさを活用してワサビ栽培の水を冷やすことも考えているとのことです。

原さんは「高度成長のツケが今来ている。温暖化を食い止めるには先進国の省エネシステムを途上国にどう広めるかが課題。そのために日本がリーダーシップを発揮してほしい。これからの経済成長ではエコを取り入れたビジネスが大事で、人類の将来は再生可能エネルギーとバッテリーの開発にかかっている。」と語りました。

なるほど ザ・ワード

STOP温暖化・焦点の言葉 ㉛

＊地球温暖化をめぐる報道などで、いま焦点となっている言葉を簡単に解説します

4パーミル・イニシアティブ

「４パーミル・イニシアティブ」という聞き慣れない横文字の言葉は、2015年の気候変動COP21でフランス政府が提案したことに端を発する国際的な取り組みで、日本も参加しています。パーミルとは0.1％のことで、４パーミルは0.4％になります。農地や森林などの面積を減らさないという前提で、その土地の土壌中に炭素（有機物）を毎年４パーミルずつ貯留させれば、利用のために上物（植物体）を収穫し続けても大気中のCO_2は劇的に減るという科学的な予測に基づいています。有機物の貯留は、土壌の表層30～40cmに集中しますから、有機農業の推進には大きな期待がかかります。そもそも農業というものは、土壌の表層付近の養分を作物に移動させ、収穫物として土壌中の養分をその場から持ち去る行為のことです。化学肥料だけの農業では、土壌中に有機物が貯留されないばかりか、短期間で尽きてしまいます。

フランス政府が４パーミル・イニシアティブを提案した理由は、温室効果ガスの排出削減に対する農業部門の貢献を考えてのことでしたが、現在はさらに野心的です。４パーミル・イニシアティブの行動の主軸は有機農業の推進にあり、これを徹底させることで、環境貢献、人体への安全、食文化、食味といった部分でフランス農産物の価値を大きく引き上げます。その結果、フランス農産物の国際競争力が高まり、農業が振興するという狙いも視野に入ってきました。一方、農地が再び生物の生息場所として機能するようになり、水源の保全にもつながります。農地以外でも、植林や緑化によって土壌侵食を防ぐと、土壌から有機物が失われる土壌劣化（砂漠化）も防止することができます。気候変動防止への国際的関心の高まりの中、４パーミル・イニシアティブを国策とすることで、気候変動COPなどでの発言権を強くすることもでき、一石多鳥の効果が期待できるようになってきています。農業大国フランスらしい施策ですね。

では、日本ではどうでしょうか。様々な対応が考えられますが、私たち市民ができることは、まずは有機農産物を選択的にエシカル（倫理的）消費し、農産物のシェアを有機農業側にシフトさせることです。シェアが変われば流通も変わります。結果として有機農地は増えます。さらに、たくさんの木を植え、花や自然を愛でることです。街は緑にあふれて住みやすく、文化活動も活発になり、子供たちの遊び場は増え、生活満足度は高まります。そんな「楽しい改革」が気候変動防止のキーになるのですから、４パーミル・イニシアティブには大賛成したいものですね。

イベント情報

◆わかやまCOOLCHOICEキャンペーン

2020年１月31日（金）　応募締切り　　※詳細はhttps：//wenet.info/cc/

◆第16期和歌山県地球温暖化防止活動推進員養成講座

那智勝浦町会場　2020年１月26日（日）13：30～16：30
場所：那智勝浦町体育文化会館　研修室
（那智勝浦町天満441-8）
内容：カードゲーム「SDGs de 地方創生」+推進員養成講座

上富田町会場　2020年２月15日（土）13：30～16：30
場所：上富田文化会館 研修室（予定）
（上富田町朝来758-1）
内容：カードゲーム「SDGs de 地方創生」+推進員養成講座

有田川町会場　2020年３月15日（日）13：30～16：30
場所：金屋文化保健センター（有田川町金屋７）
※わおん通信秋号でお知らせした場所から変更になっていますので、御注意ください。
内容：カードゲーム「SDGs de 地方創生」+推進員養成講座
問合せ：和歌山県センターまで

◆親子オーガニック料理教室

2020年２月２日（日）10：00～12：00
場所：橋本市高野口地区公民館（橋本市高野口町名倉81-2）
参加費：大人700円、小人500円
定員：先着15組
主催：伊都・橋本地球温暖化対策協議会
申込み：事務局　黒井（TEL：090-1138-8388）

◆わかやまCOOL CHOICEコンテスト表彰式

2020年２月16日（日）13：30～15：00
場所：わかちか広場（和歌山市美園町５）
主催：和歌山県センター

◆第14回橋本市公民館まつり

2020年３月７日（土）、８日（日）
場所：橋本市教育文化会館（橋本市東家1-6-27）
主催：橋本市公民館まつり実行委員会
出展：伊都・橋本地球温暖化対策協議会

◆地球塾Vol.8

その１
～どうする？なにする？なにしたい？～
2020年２月１日（土）11：00～15：00
場所：創-hajime- cafe（紀の川市粉河853）
内容：山積する問題解決の糸口を探る
参加費：1,800円
※ランチ（ドリンク・デザート付）代金込み
定員：先着25人（要申込み）

その２
～スローシネマカフェ：
アジアの叡智シリーズをたっぷり観る１日～
2020年２月２日（日）　10：00～17：00
場所：創-hajime- cafe（紀の川市粉河853）
入場料：1,000円（申込み不要）

主催：地球塾プロジェクト（NPO和歌山有機認証協会、NPOわかやま環境ネットワーク、NPO市民の力わかやま）
問合せ／申込み：和歌山県センターまで

◆岩出市民ふれあいまつり

2020年３月１日（日）
場所：岩出市総合保健福祉センター（あいあいセンター）
（岩出市金池92）
イベントスケジュール
・式典…午前９時～10時（３階多目的ホール）
・催事…式典終了後、随時開始
（入場は午後３時30分まで）
ごみ減量化啓発コーナー（ストップ温暖化岩出の会）など各種イベントコーナー
問合せ：岩出市民ふれあいまつりに関することは
岩出市役所　子ども・健康課まで
TEL：0736-61-2400

あなたの活動をサポート　**わかやま推進員サイト**　わかやま 推進員　検索　イベント情報も随時更新

県センター通信

新たな年を迎えました。昨年は皆様の御協力で「おもしろ環境まつり」を盛況のうちに終えることができました。事務局より御礼申し上げます。このイベントに関わった全ての方の活動が、今年もますます活発に行われることを願います。気候変動に関する世界の状況や最近の日本の現状を知るに付けて、地球温暖化防止活動の重要性が改めて見直される時が来ていると感じます。今起こっていることを知り、そして温暖化防止に向けて行動する人の輪を広げていくために皆様の活動がとても重要になってきています。2020年も温暖化防止に向けた具体的な取り組みを進めていただけるよう県センターは引き続きサポートしてまいります。

2019 冬号 vol.35

わおん通信

発行／和歌山県環境生活総務課
〒640-8585 和歌山市小松原通1-1
TEL：073-441-2674　FAX：073-433-3590
mail：e0317001@pref.wakayama.lg.jp

編集・お問い合わせ／和歌山県地球温暖化防止活動推進センター
〒641-0014 和歌山市毛見996-2
TEL：073-499-4734　FAX：073-499-4735
mail：wenet@vaw.ne.jp

PRINTED WITH SOY INK